

陸軍第16軍は、兵補幹部要員の養成のほか、一般青年を兵補として訓練する兵補学校を多数設立し、陸軍兵補の本格的な大量創出をおこなった。

そして、連合軍の反撃が本格化し東インドネシアでの制海権・制空権が失われた1944年3月以降では、東インドネシアの軍政を担当する海軍が独自に海軍兵補を創設し、多くの一般青年を兵補としてリクルートしている。

このように兵補の募集の手段、訓練の内容および部隊内の任務は、日本軍の戦局に対応しているが、これらはジャワにおける防衛義勇軍の創設とも関連していることが確認される。兵補は防衛義勇軍の創設を本格化し、その一部は防衛義勇軍の基幹要員となった。逆に、防衛義勇軍の創設を受けて、兵補のリクルート・任務に変化が生じ、兵補に対する住民の認識にも変化が見られる。ここに、住民にとってジャワ防衛義勇軍がインドネシア民族軍として位置づけられる一方、兵補は日本軍の尖兵として認識される契機が生まれたのである。

日本軍政下のマラヤにおける日本語教育—現地編纂日本語教科書の分析を中心に

松永 典子

マラヤの日本語教育及び日本語普及については、軍政研究の一環としてはある程度の研究の蓄積があるが、特に日本語教育史の研究は近年緒に就いたばかりである。従来の研究においては資料的な制約もあり、昭南(シンガポール)の記述に偏ってきた観がある。占領初期から中期にかけて(1942～1943)、昭南には第25軍軍政部及び昭南軍政監部が置かれ、そこがマラヤ軍政上、最重要視されていたことは確かである。

しかし、教育施策的には行政同様必ずしも軍政部主導で日本語教育が推進されていたわけではない。つまり、軍政部より先行して行政活動を始めていたマラヤ各州(政庁)では民情の安定をはかり、行政上の事務を円滑化するため、各州独自で日本語の普及に取り組んでいた。政策的には、軍政部が各州の具体的施策を後追いの的に調整していこうとするのが見られる。従って、日本語教育を実態レベルで解明するには昭南の教育状況一般だけでなく、各州における日本語教育の具体的展開を究明していく必要がある。その際、まず第一に手掛かりとなるのは当時の日本語教師、生徒の証言と残存する教科書類である。マラヤを含め南方各占領地では日本人教師が不足していたので、日本人教師がまず現地人教師に日本語を教え、次いで、現地人教師が現地人子弟に教えるという教授形態をとった。また、初等教育では必ずしも教科書の供給は十分とは言えなかったが、残存する教科書類の保持者の証言から少なくともペラ州の師範教育では各人に教科書類が供与され、それをもとに現地人教師は日本語を教授したことが確認できる。本報告では、マラヤ現地で使用された日本語教科書をその編纂目的、種類、著者、発行時期、仮名遣いと表記、思想性といった観点から分析し、証言と教科書を入手できたペラ州の事例を参考に州レベルでの日本語教育の具体像を考察することを目的とする。

教育方針の面からみると、日本国内でもマラヤでも日本語教育に対する体制が整ってくるにつれて、文部省の日本語教育方針の方向へ向かおうとする動きは見られた。しかし、戦争末期(1944～1945)に日本語だけによる教育がうまくいかなかったことから、現地語による教育が復活しようとした動きなども考え合わせると、文部省の方針が現地でどれほど効力をもったかには疑問が残る。つまり、現地編纂教科書の内容や文部省編纂教科書の普及

度などから言えば、文部省の「国語」教育へと向かう日本語教育方針は、実態レベルではうまく機能しなかったということが窺えるのである。この点は、さらにマラヤの日本語教育の全体像からも解明されなければならない課題であると言えよう。

漢文=字喃文対訳『佛説大報父母恩重經』に見る字喃について

清水 政明（京都大学大学院）

本研究の目的は、漢文=字喃文対訳『佛説大報父母恩重經』に見る字喃の音韻的特徴を調査することにより、15世紀ベトナム語の音韻特徴の一端（頭子音及び音節構造）をかいま見ようとするものである。使用するテキストは Paul Demieville によるパリアジア協会遺贈本で、1979年に在ハノイ漢喃研究院へ寄贈されたそのコピー版である。

テキスト中の避諱文字および本文末尾に付け加えられた半葉の記述に見える「鄭楨」という人物（おそらく出版に関わった人物）の在官時期を『大越史記全書』及び『大越史記續篇』で調査し、また、訳文のベトナム語の語彙的特徴を阮薦『國音詩集』と比較することにより、初版が15世紀頃出版され、18世紀に重版としてパリアジア協会所蔵テキストが作成されたという暫時的仮定が立つ。

まず、各字喃を対応する本文の漢語を参照しつつ現行のローマ字正書法により現代の対応語彙にローマ字転写し、その読音と声符の現代漢字音を比較対照する。その対応状況を Proto Viet Muong (PVM) 初頭子音体系、『安南訳語』の示す初頭子音体系（15-16世紀）、Alexandre de Rhodesの『辞書』の示す初頭子音体系（17世紀）、及び現代の初頭子音体系の中に位置付け、それが示す音韻状況が共時的統一性を持つことを確認しつつ、『安南訳語』に先行する資料であることを結論付ける。それは諧声符漢字音/t-/（</s-/：心母）が/t-/（</s-/：PVM）及び/r-/（</s-/：PVM）を初頭子音とする字喃の両方を表音することから、『安南訳語』の段階で既に完了していたと考えられている/t-/</s-/の変化が本資料の段階でまだ完了していなかったと判断できるからである。

次いで、本資料所収字喃の最大の特徴である1形態素を2文字要素で表記する諸例を分析することにより、当時の音節初頭子音複合のパターン、及び Proto Viet Muong に特徴的であった双音節構造の痕跡を見る。初頭子音複合の場合、音節構造の推移 $C_1 \circ C_2 V C \rightarrow C_1 C_2 V C \rightarrow C_3 V C$ の恐らく第一段階における $C_1 \circ$ を2文字単位の第一要素が、

$C_2 V C$ を第二要素が表記したものと考える。また双音節構造の痕跡の場合、 $C_1 \circ C_2 V C \rightarrow C_1 \circ + C_2 V C \rightarrow C_2 V C$ という推移における第二段階の $C_1 \circ$ を第一要素が、 $C_2 V C$ を第二要素が表記したものと考える。特に後者に関し、以下の対応する Ruc 語の語彙が興味深い。字喃「車莽」(xa) măng；「舍莽」(xá) măng：Ruc語 /caməŋ¹/、「破散」(phá) răn：/pusi5n³/、「可汝」(khả) nhó：/kuo³/等。

海外援助がフィリピンの開発行政の行政改革に及ぼす影響

小原 篤次

冷戦構造の崩壊、先進国の財政難などから、対途上国援助に関する世論動向は決して肯定的なものばかりではない。日本政府においても、着実に増額してきたODA予算を例外視しないとの議論が出始めている。このため援助供与国・機関（ドナー）は、非援助国の援助執行に対し、援助の効率性や吸収能力の向上などを強く求めている。本報告は、こうしたド